

優秀賞

『こころ』

夏目漱石著、新潮社、1984.

内本 義宜（短期大学部 こども教育学科 2年）

初めてこの作品に出会ったのは、高校2年生の終り頃だった。ちょうど、現代文の教科書に作品の後半部が掲載されていたのだ。

先生と「K」とは同じ下宿に住んでおり、二人はこの家に住む「御嬢さん」に好意を持っている。ある日、親友「K」から「御嬢さんが好きだ」と一方的に告白される。そこで、彼は慌てて御嬢さんとの結婚をその母親に申し込む。しかし、彼は抜け駆けした行為に後ろめたさを感じるのだ。そうこうしているうちに、「K」が隣の部屋で自殺する。この展開に強い衝撃を受け、改めて全文読んでみようと思ったのだ。漱石といえば「坊ちゃん」くらいしか知らなかったが、この作品は、以後何回も読みかえすことになった。そして、読みかえすたびに新しい発見があるのが面白い。

作品は、上「先生と私」中「両親と私」下「先生と遺書」の3部に分かれている。教科書に載っていたのは下の後半部だった。上では先生と私との関係が丁寧に描かれている。先生は大学の先生らしき人できれいな奥さんと二人で暮らしている。仲の良い夫婦だが、どこかに蟠りのようなものがあるらしい。私は地方から出てきた大学生で、先生から刺激を得たいと考え、頻繁に先生宅を訪ねている。中では私と年老いた両親の様子が描かれており、先生から手紙をもらった私は危篤の父親を置いて、先生のもとに向かう。下では先生が手紙を通して、自身がなぜ自ら命を絶つことになったかを明らかにする内容となっている。

私は若いころからこの作品に人生の真実らしきものを見出してきたようだ。本文の所々に当時、気になった言葉に赤線が引かれている。（以下に抜粋する）

「然し・・・然し君、恋は罪悪ですよ。」（上 十二）（先生が私に「君は恋をしたことがありますか」と聞いたのち発した言葉）

「金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」（上 二十九）（私が先生にどういうときに人は悪人になるのかと聞いた答え）

「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」（下 三十）（自殺した K の言葉）

「私はただ妻の記憶に暗黒な一点を印するに忍びなかったから打ち明けなかったのです。純白なものに一雫の印気でも容赦なく振り掛けるのは、私にとって大変な苦痛だったのだと解釈してください。」（下 五十二）（奥さんに真実を語らなかった理由）

大学受験に失敗したころ、大学生になったとき、就職し、一人暮らしを始めたころ、結婚生活に入ったころ、初めて子どもができたとき、そして、父親を亡くした時、短大に入学したとき等、人生の節目で何故か手にして読んでいたのだ。そのため、この本だけは、カバーが擦り切れ、破れてしまっている。

夏目漱石といえば、明治の知識人、文豪として名高い人物であるが、その文章に触れると、意外と親しみやすさを感じるもの。ぜひ、一読を。